

## レジリエンスの人類学に向けて —ヴァヌアツにおけるサイクロン災害を事例として—

吉岡政徳（神戸大学名誉教授）

### はじめに

レジリエンス（回復力）概念は、物理学用語としてスタートしたようであるが、1973年のホリングの論文以来（Holling 1973）、様々なレジリエンス研究が社会生態システムとの関連で登場するようになってきた（ex. 梅津他 2010）。また精神病理学の分野でも、ストレスの影響に対する緩衝要因としてのレジリエンス概念が広く論じられている（斉藤、岡安 2009）。一方で近年は、災害からの復旧・復興、あるいは防災との関係でこのレジリエンス概念が用いられる研究が多数出現してきている。日本では特に東日本大震災以後、「災害に対する対応力」としてのレジリエンスを論じる議論が生まれており、そうした中には、行政がいかなる役割を演じるのかということに関する研究、災害からの回復から見るエネルギーシステムのあり方の研究などが見いだせるが、より活発な議論を展開してきたのが社会学的な領域であり、社会的レジリエンスを対象とした研究である。

それらの研究でしばしば引き合いにだされるのが、2005年にハリケーン・カトリーナによって被災したニューオーリンズの事例である。大きな被害を出した同市のある地区は2年後にはほぼ回復したにもかかわらず、別の地区では5年経っても被災直後のままであるかのような状態であったという（浦野 2007: 33、アルドリッチ 2015: 1）。そこで問われたのが、同じ規模の災害に遭遇しながら被害の規模に違いが生じるのはどうしてか、あるいは、災害後、回復する地区とそうではない地区が存在するのはどうしてかということである。この問題を、被災したコミュニティの文化、あるいは社会資本との関連で考察しようとする研究が社会的レジリエンスの研究である。それはつまり、コミュニティそのものが持つ回復力を問う研究であるといえる（浦野 2007: 31、大矢根 2010、アルドリッチ 2015: 2）。

ところで、災害をテーマとする人類学研究は、少ないわけではない（ex. 清水 2003、林 2007）。そこでは、「災害の持つ社会的側面、すなわち被害の規模や様相そして復興までのプロセスに影響を与える社会的要因」に着目し「社会現象としての災害」を捉えようとする研究がすすめられている（林 2007: 1）。そして、それらの一連の研究の中で、社会的な脆弱性という概念に基づいて災害および復興を考えていこうとする研究が重要な位置を占めているという。この脆弱性に着目する視点は、「災害の社会的文化的な構築という側面」を重視したもので、災害を非日常ではなく、「持続的な日常性という文脈のなかで捉えよう」とするものである（木村 2005: 402）。脆弱性に着目する研究は、人文地理学的な研究でも重要な位置を持っているが（島田 2009）、社会学や精神医学で提唱されているように（浦野 2007、加藤 2008）、脆弱性モデルからレジリエンスモデルへの

転換が人類学的研究においても採用されるべきであろう。

さて、レジリエンスの探求が進んでいる社会学的研究ではあるが、以下の二つの問題を抱えていると言える。一つは、災害が発生するとその地域での調査を行うが、それは以前から持続的に行われてきた研究の中に位置づけられるのではなく、短期間のもので、しかも単発的であり、その結果、その地域における社会資本の全容をつかむことができないまま理論的なレジリエンス論だけを提起せざるを得ないことが多いという点である。もう一つは、これと連動することだが、社会学的研究では、コミュニティ・レジリエンスを一般化して考えるため、どんな地域においても同様のレジリエンスのあり方を指摘することができるという前提に立っているということである。しかしそれでは、どの地域で生じた災害に対しても同じ結論が生み出されることになるのである。

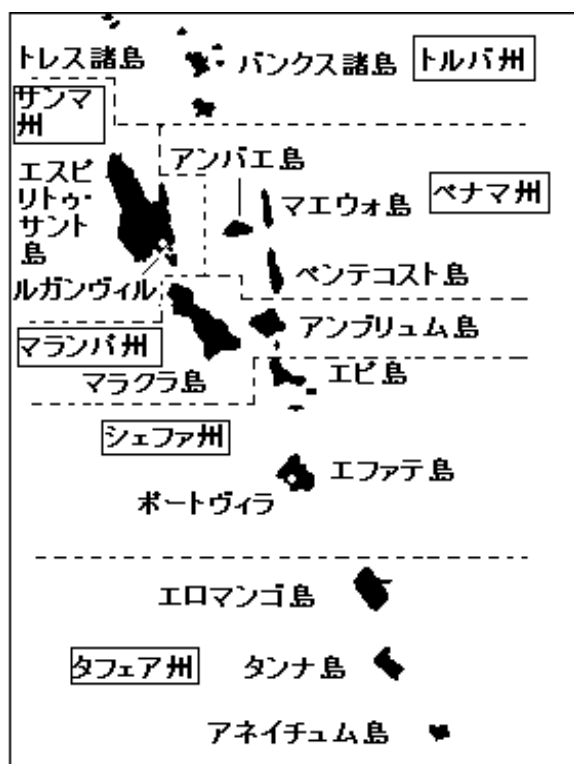
これに対してレジリエンスの人類学的研究は、より民族誌的であり、より地域研究的であることが可能である。それは、地域独自の文化、あるいは社会資本がいかなるものかということを追及してきた人類学的研究の性質と関連するが、そうした持続的な地域研究が行われてきた地域で生じた災害を対象とするため、社会学的研究に比べるとはるかにその地域独自の社会資本と社会的レジリエンスの関連を把握することができるメリットを持つと考えられるのである。本論は、こうしたレジリエンスの人類学にむけた覚書としての位置づけを持っており、筆者が長年フィールドワークを実施してきたヴァヌアツ共和国において生じたサイクロン災害とそこからの復旧を題材にしたフィールド報告である。

ヴァヌアツは、2015年3月に、最大風速85mという超巨大サイクロン・パムに襲われ、大きな被害を出した。被災したのは、ヴァヌアツ全土だったが、首都のポートヴィラと首都が位置するヴァヌアツ中部のエファテ島、そして特に南部の島々の被害が甚大だと言われた。首都の80%の家屋が被災したと言われ、電気、ガス、水道、電話、インターネットなどが停止し、都市機能が完全にマヒするなか、オーストラリアからは軍隊が派遣され、全世界から政府関係やボランティアの団体の支援活動が展開されることで、事態の収拾が図られた。また、全世界で義捐金募金の活動が行われたが、日本でも大々的な募金活動が展開されたため、それまで殆ど知られていなかったヴァヌアツという国名が大勢の人に認識される結果となった。

このヴァヌアツの災害では、しかし、災害因となったサイクロンの巨大さに比して災害からの回復がきわめて早いと言われている。特に首都に関しては、現地のJICA事務所からもその復旧の早さが伝えられたが、首都の80%の家屋は被災したにもかかわらず、短期間で家々が再建され、都市が機能を取り戻すのも早かったというのである。インフラの回復は、サイクロンの場合は、地震や津波に比べると確かに早いことは想定される。しかし、コミュニティはどの自然災害でも巨大であればあるほど大きく破壊されるわけであり、ヴァヌアツの災害からの回復力は、特筆に値すると言える。筆者は5月に首都のポートヴィラを訪れ災害から2か月たった首都を見てきたが、その状況を踏まえて議論を進めていく。

## 1. サイクロン・パムのヴァヌアツへの襲来とその被害

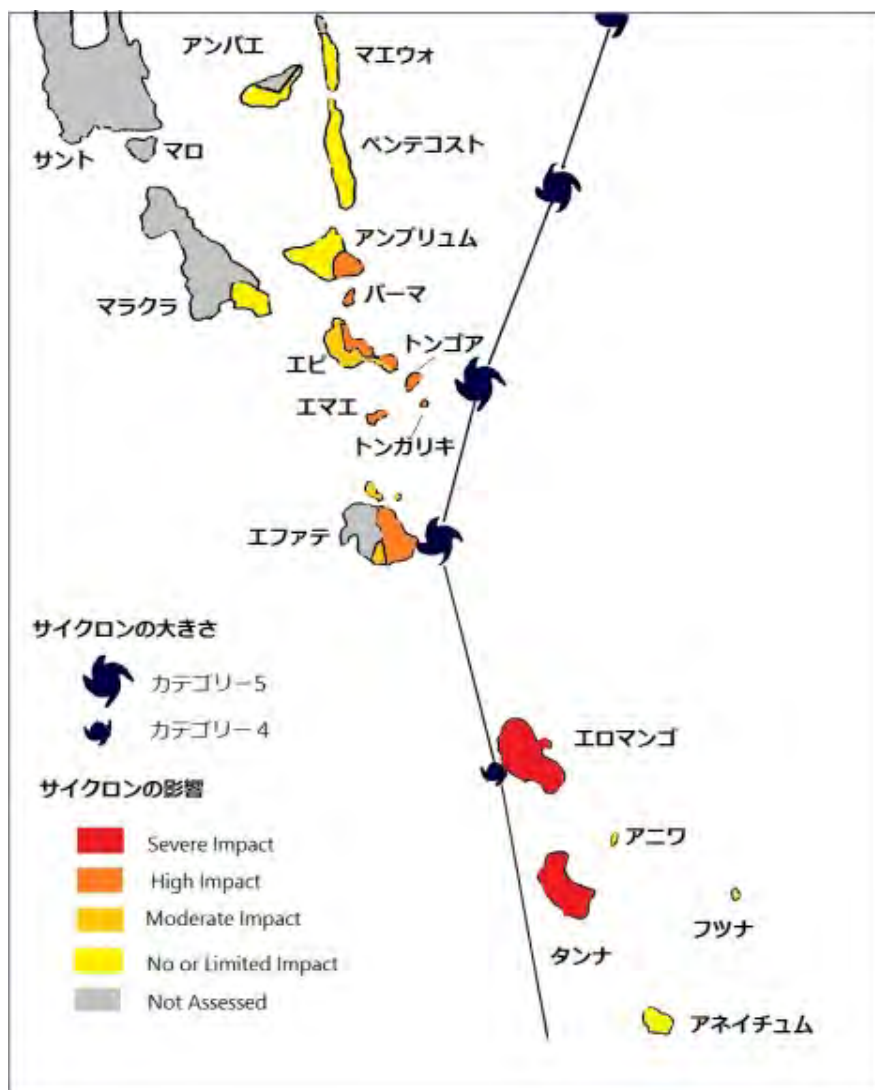
ヴァヌアツ共和国は1980年、イギリスとフランスの共同統治領ニューヘブリデスから独立した国家で、2015年の人口は約27万人。GDPは8億1500万USドル(2014年)で、世界第178位。国連の後発開発途上国(いわゆる最貧国)に位置付けられているが、現在でも農村部では自給自足が成立している稀有な地域でもあり、都市で職業を見つけることができない者も、出身の島に帰れば畑を持ち、タロイモやヤマイモを生産して自給自足の生活が成立している。その意味では、「飢えのない最貧国」ということになる。首都は、中部のエファテ島にあるポートヴィラで、人口は44,000人。国全体は、北からトルバ州、サンマ州、ペナマ州、マランパ州、シェファ州、タフェア州という6つの州から構成されている(地図1)。



地図1 ヴァヌアツ共和国

さて、サイクロンはその勢力の強さに応じて等級分けされている。1分間の平均風速のなかの最大値を最大風速とし、一番下の等級であるカテゴリー1は最大風速が毎秒33m~42m、カテゴリー2は、43m~49m、カテゴリー3は、50m~58m、カテゴリー4は、59m~69m、そして最大等級のカテゴリー5は、毎秒70m以上というように区分されている。ヴァヌアツを襲ったサイクロンは、カテゴリー5に区分されたが、日本にやってくる台風

で風速が毎秒 33m~43m の場合が「強い台風」、44m~54m の場合が「非常に強い台風」と言われていることを考えれば、カテゴリ-5 のとんでもない強さが推察されるであろう。パムの経路は地図 2 に示してある。3 月 12 日にカテゴリ-5 に発展したパムは、13 日には 1 分間の最大風速 75m を記録し、その勢力のまま 13 日夜にヴァヌアツ中部に接近し、翌 14 日には勢力を落としてカテゴリ-4 となって南部の島々を通り過ぎている。最低気圧は 896 ヘクトパスカル、最大瞬間風速は、(当然のことながら最大風速よりも大きく)、ポートヴィラで 85m を計測したと言われている。



地図 2 サイクロン・パムの移動経路 (World Food Programme 2015: 2 の地図に基づき筆者作成)

この巨大サイクロンによって、ヴァヌアツ全人口の半分を超える 166,000 人が被災したが、死者は 11 人であった。ペナマ州、マランパ州、シェファ州、タフェア州が甚大な被害を出したと言われているが、農業関係でいえば、タンナ島やエロマンゴ島などタフェア州の島々、またシェパード諸島（トンゴア島、トンガリキ島、エマエ島などを含む）などシェファ州の島々ではほとんどのフルーツ、野菜、穀類、家畜などが甚大な被害を受けると同時に、根菜類であるイモ類なども、根こそぎ吹き飛ばされるか水浸しになるなどしてしまった<sup>(1)</sup>。マランパ州のアンブリュム島東部、パーマ島、シェファ州のエピ島でもフルーツやココナッツなどで大きな被害をだしたが、畑の産物についてはまだ少しは助かったと言われている。コプラやカヴァなどの換金作物<sup>(2)</sup>も甚大な被害をこうむった。また、タンナ島やエロマンゴ島では 70%の家屋が破壊または大きな被害をこうむり、アンブリュム島東部、パーマ島、シェパード諸島でも、40%から 70%の家屋が破壊等の被害をこうむった。首都のポートヴィラでも家屋の崩壊がひどく<sup>(3)</sup>、道路や橋までも被害にあい、さらに、電気、水道などが数日にわたりストップし、広く普及している携帯電話も、ポストの倒壊などで不通の状態が続いた（World Food Programme 2015）。

学校や保険関連施設など、公的な施設も被害を受けた。すべての学校は 3 月 30 日まで休校となったが、校舎そのものが広範に被害を受け、首都の学校もあちらこちらで屋根が飛ぶなどの被害を受けている。保険関連の施設の被害は表 1 のとおりである。シェファ州が最も大きな影響を受け、24 の保険関連施設のうち 21 が被害を受けた。そして、トンガリキ島とトンゴア島では 4 つの施設のうち 3 つが破壊された。一方タフェア州では、12 の診療所のうち 9 つ、4 つの保険所すべてが被災し、州病院は 82%のダメージを受けた。イキリ診療所とキトウ保健所は被災から 1 か月たっても稼働していないという。アンバエ島を除いたペナマ州では 31 の保険関連施設のうち 11 が被災し、マラクラ島を除いたマランパ州では、8 施設のうち 6 施設が被害を受けたという（Ministry of Health 2015: 14）。

表 1 保険関連施設の被害（Ministry of Health 2015: 14 の table より）

保険関連施設	破壊	殆ど破壊	一部破壊	なし	合計
Dispensary	5	2	28	15	50
Health centre	1	6	7	5	19
Provincial hospital		1			1
Referral Hospital			1		1
合計	6	9	36	20	71

## 2. 災害後の動き

ヴァヌアツ国内では National Disaster Management Office（NDMO）が設立され、すべてを取り仕切る形で動いた。オーストラリアからは軍が派遣され、活動支援のため駐留した。

オーストラリア軍の駐留していたホテルは5月に入ってからホテル業務を再開している。NDMOは海外からの公的な支援活動、様々なNGO、NPOのチームの受け皿となり、采配をふるった。ヴァヌアツ政府は、瓦礫、倒木の処理、食糧配布を実施し、ペンテコスト島南部以南の島では1年間学校経費無料の措置が取られた。また首都では、屋根材となっているトタンの減額措置（通常価格の半額以下）が発表された。

災害発生直後は、海外から20の医療チームが到着した。NDMOの指示に基づいて活動を行ったが、そのうち4月6日までに11チームが帰国している。これは、当初の目的を達成したと考えられたからである。さらに、4月末には4チームだけが活動を継続することになる程、復旧は早く進んだと言える。

海外からの支援金も多く寄せられた。中国が最大の援助国で、約5.8億円、オーストラリアが4.5億円、イギリスが3.5億円、ニュージーランドが2億円、日本は約2000万円相当の物資支援であった。3月26日付では、総額が19億円にのぼったが、ヴァヌアツの年間の国家予算が100億円程度であることを考えれば、多額の支援金が寄せられたことが解る。しかし、瓦礫や倒木の処理など初動の活動で、ヴァヌアツの政府予算を使い切ってしまったとも言われている。

食糧配布は第一次が3月に、第二次が4月に、第三次が6月に行われた。第一次配布の段階では被害の状況がまだ明確につかみ切れていなかったのか、ペンテコスト島への食糧配布がタフエア州のタンナ島について多く配布されるように計画されたが<sup>(4)</sup>、第二次配布では、被害の大きかったエピ島、シェパード諸島、エファテ島北部・東部、エロマンガ島、タンナ島などが priority1 と指定され、マエウォ島、ペンテコスト島、アンブリウム島、ポートヴィラも含めたエファテ島南部、そしてアネイチュム島が priority2 とされた。第三次では、エピ、シェパード、エファテなどシェファ州の島々とエロマンガ、タンナというタフエア州の島々が priority1、ペンテコスト島南東部、アンブリウム島、パーマ島、アネイチュム島が priority2 と位置付けられた。

さて、カテゴリ-5という驚異的なサイクロンであるにも関わらず死者が11名という点は注目された。ヴァヌアツはサイクロン災害が頻繁に起こるところであり、パムの接近に伴って広報活動が活発に展開され、人々はそれに備えていたと言われている。しかし、人口が27万人というマイクロ・ステートで、11人という人数の持つ割合は決して小さくはないとも言えよう。一方、回復の速さには大いに注目する必要がある。災害直後にヴァヌアツに到着した海外から派遣された20の医療チームのうち、その大半が1カ月ちょっとたった時点で帰国しているわけだが、これは、当初予想された病気の蔓延が生じなかったということが作用していると思える。

保険衛生関係の海外からの支援者が想定した一つのシナリオがある。それは、①サイクロンによってトイレが破壊され、不適切な場での排泄が行われ、それが河川に流れ込む、②ヴァヌアツのほとんどの地域では天水をタンクに貯める等して飲料水として用いているが、サイクロンによって天水をためる設備（トタン屋根、トイレ、タンクなど）が破壊さ

れ、人々は河川の水を飲用する、③汚染された河川の水を飲用することで病気が流行する、というものである。しかし、現実にはこうしたことは生じなかった。トイレの建物が風で飛ばされたとしても、簡易に囲いを作ることは可能であり、農村部では、災害後もトイレのあった場所がそのまま使用されたことが考えられる。天水をためる設備が破壊されるのは大きな問題だが、筆者が滞在経験のあるペンテコスト島では、タンクのない所では、日常的にも雨が降ればドラム缶を用いて水を貯める等の対処が行われていた。従って、災害後の病気蔓延のシナリオそのものが、ヴァヌアツの文化的状況、あるいは生活の現実を見ることなく設計されたものであるということになる。

教育に関する懸念も一般的な図式には合わなかった。一般的には、災害が生じると被災した人々が一時的に学校等の公共の建物に避難する。ヴァヌアツの都市部でも、被災した人々は学校など避難所としていされた場所に一時的に避難していた。しかし、人々は、授業が4月に始まるとみんな学校を出て行ったという。その結果、学校は壊れた場所以外のところで授業を再開したというのである。

### 3. ポートヴィラの状況

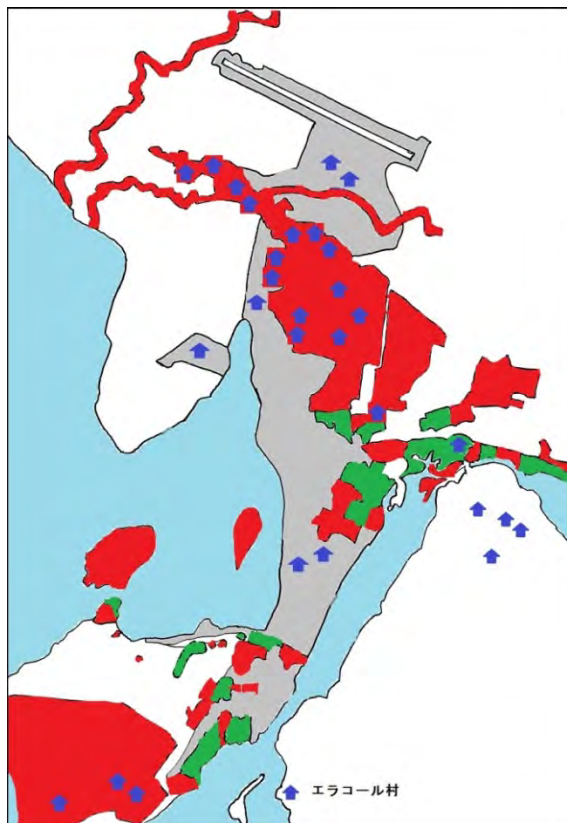
ポートヴィラは行政的には5つの区に分割されている。北から、マラポアータガベ区、アナブルーメルコーベ区、フレッシュウォータータシリキ区、中央区、南区（地区としてはナンバーツー及びナンバースリー）である。ただ日常生活で人々は、これらの区を構成している各地区名で地域を区分している。中央区の西側（地図4のブーゲンビル通りから国会議事堂の北あたりまで）がポートヴィラのいわゆる繁華街であり、ホテル、商業施設、銀行、官庁舎などが建ち並んでいるが、東側にはシーサイド地区という居住地を含んでいる。

表2 ポートヴィラの住居のタイプ

	総計	木	金属	コンクリート	伝統材	makeshift	その他
壁	11,606	1,560	3,582	5,486	300	580	98
屋根	11,606	113	10,548	299	436	183	27
床	11,606	610	219	10,072	409	100	196

さて、サイクロンの被害の最も少なかったのはこの中央区の西側、いわゆるビルが立ち並ぶ繁華街であり、被害が大きかったのは、それ以外の居住地である。ポートヴィラの27%の家屋は簡易（makeshift）住宅と言われているが、2009年の調査では表2のような結果が出ている（Vanuatu National Statistic Office n.d.）。金属というのはほとんどがトタンなどを指しており、伝統材というのは竹や場合によってはヤシの葉などを含んでいる。この表で言う makeshift が何を指しているのか明確ではないが、壁材としてトタンを使っている住宅は、トタンの種類にもよるが、あまり頑丈な作りとは言えない。最も強固な壁

材はコンクリートであり、コンクリートの壁とコンクリートの屋根で囲まれた複数階を持つビル、あるいは何階建てかのマンションのような建物が集中する中央区の被害が少ないのは理解できる。しかし一戸建てとなると、公共のものも含めてほとんどの建物はトタン屋根を用いているため、サイクロンの強風によって屋根が飛ばされる被害が多く出たようである。



地図 3 ポートヴィラの被災状況 (3月半ば)  
(World Food Programme 2015: 15 の地図を基に筆者作成)

- 赤：被害の見られた所
- 緑：被害のない所
- グレー：雲に隠れて評価不能
- ↑：避難所



地図 4 ポートヴィラの地区  
(筆者作成)

中央区や南区のナンバースリー地区は、雲に覆われていたため空からの確認は出来なかったということであるが、これらの地区にはコンクリートのビルや、コンクリートブロックの壁、強度のつよいトタン屋根でできた高級な一戸建て住宅が多い地区であり、被害も少なかったと思われる。ナンバースリー地区も一部を除いて確認できなかったようであるが、



緑の部分は高級ホテルや高級アパートメントが立地しているところである。最も広範囲に被災したのは、タガベ地区、フレッシュウォーター地区、オレン地区、シーサイド地区、アナブル地区などである。これらの地区には、バラックのように見える簡易住宅の一戸建てが多く林立しており、被害が大きくなったと言えよう。避難所として学校や教会が指定され、当初 4000 人が避難していたが（World Food Programme 2015: 15）、学校などが始まると同時に人々は、親族の家に居候するなどして避難所を出ている。なお、地図 3 の最南端の赤い部分はポートヴィラ市域から外れているが、海岸沿いには村落やビーチリゾートが点在しているところである。

筆者が訪れた 5 月のポートヴィラの繁華街は、被災した形跡がほとんどわからないくらいの景観だった（写真 1）。市のマーケットには、近隣の農村から野菜や果物が運ばれてくるが、さすがにその品数は少なく値段も高かった。フルーツ類はあまりなく、野菜の種類もわずかであったが、私が滞在していた 1 週間の間だけでも、日に日に野菜やフルーツの種類が増えて行った。繁華街は、しかし、よく見るとサイクロンの爪痕を見ることができた。そしてメインストリートを離れて市の内陸部へ行くと、屋根を吹き飛ばされた家屋が散見されると同時に、被害を受けた学校もそのままの状態であった。

壁がコンクリートブロックでできている比較的頑丈な家屋の場合は、トタン屋根が吹き飛び、それがそのまま 5 月になっても残っていたが（写真 3, 4）、壁が木張りであったりした家屋は壁ごと吹き飛んでいたのも、家屋として残っていなかったと言える。こうした住居に対してはテントなどが配布されたところもあった（写真 5）。ポートヴィラはカヴァを飲ませるカヴァ・バーが多数存在することで知られているが、当時有名であったチーフス・ナカマルというカヴァ・バーは、サイクロンによって完全に吹き飛ばされてしまったという。しかし 5 月に行った時には、新たに簡易住宅が建てられ、カヴァ・バーが再会していた。大きな被害を受けたフレッシュウォーター地区の住宅も、サイクロンで殆ど壊滅したと言われていたが、5 月にはそれらは再建されていた（写真 6）。



写真 1 2016 年 5 月のポートヴィラの繁華街



写真 2 “We survived Cyclone Pam.” の看板



写真3 破損した学校



写真4 屋根が吹き飛んだ家



写真5 テント生活



写真6 フレッシュウォーター地区の住宅

ポートヴィラの人々の災害に対する動きを象徴的に示した事例がある。それは、サイクロンが通過した直後、道路は倒木で塞がれ、トタンが散乱していたが、誰とはなく人々は各自チェーンソーを持ち出して来て、それら切って処理し始めたという。人々は協力しながら自力で、すぐに小さな車なら通れるような状態にまでしていったというのである。散乱していたトタンも、いつの間にか片付けられていた。一説によると、どこからか飛んできたトタンを自分の家の屋根を修理するのに使ったらしいという。つまりは、お金のある者は、半額になった安いトタンを買って自宅を修復し、お金のない者は、それら新しいトタンを買った家から吹き飛ばされてきた古いトタンを使って、協力しながら自宅を修復したということなのだろう。確かに、写真6に見るような家屋ならば、簡単に自分で修復できるように思えるかもしれない。しかし問題は、自分で手直しできるような簡易な住宅か専門家でなければ修理できないような住宅かということではないだろう。人々は、政府の支援が始まる前に、そしてボランティアが手助けの活動を開始する前に、自分たちで何とかし始めたのである。世界各地を歩いてきた JICA の関係者は、この点について次のよう

に述べていた。「日本では、公的組織がやってきて木を切って道を確保するのを静かに待つ。アフリカでは、盗みや暴動へとつながる。しかしヴァヌアツでは、暴動を起こすわけでもなく、公的機関の助けを待つわけでもなく、自分たちで処理する」。この点こそが、重要であろう。

5月、アナブル地区の高台を歩いている時に、サイクロンによって壁も吹き飛ばされ、半分柱だけになっている家を見た。その時その家から青年が現れたので、サイクロンの話を聞いていたら、彼は次のように言ったことが印象的だった。「我々は毎年サイクロンを経験している。壊れてもまた建てる。頬杖をついて困った顔をしている奴がいるか？我々はいつも笑っている」。これこそが、ヴァヌアツの人々のレジリエンスの高さを示している言葉だと言えるであろう。

#### 4. グマインシャフト都市

「はじめに」で述べたが、社会的レジリエンスの研究では、同様の被害を受けながら復旧の早い所とそうではない所が存在するのはどうしてかという問題を、被災したコミュニティの文化との関連で考察していく。それはすなわち、コミュニティそのものの持つ回復力の所在を人々の生活、人々の作り出すコミュニティのあり方から考えるということの意味する。ポートヴィラという首都機能を持つ都市が、2か月という短期間の間にほぼ復旧を終えたという事実を踏まえたときに、高いレジリエンス能力を持つ都市のコミュニティのあり方そのものを、まずは大枠から捉える必要があるだろう。

スリランカの津波災害を論じる中で澁谷は次のように述べている。「緊急支援の段階では、日本と違って、隣人や親族、隣近所の助け合いが迅速に行われました。・・・スリランカでは、遠くからボランティアが駆けつけて、被災地に長期滞在するという格好はとりません。隣近所の助け合いが一番大きかったと思います」（澁谷 2007: 15）。ポートヴィラで見出されたものも、まさに、この「助け合い」であろう。街路をふさいだ倒木を片付け、飛んできたトタンを処理し、お互いの家屋の修理を実施したその姿は、まさしく、この隣人や親族の助け合いの姿であると言える。避難所に指定された学校に寝泊まりしていた被災者が、学校が始まると同時に、学校を出て、自らの親族のもとに身を寄せたのも、こうした相互扶助精神の成せる業である。私がフィールドワークをしてきたペンテコスト島北部の言葉で、相互扶助はメメアルアンア (*mwemwearuana*) と呼ばれており、自らの生活の最も重要な指針であると考えられている (吉岡 1998: 432-433)。この精神は、自分が何かしたら、その相手が今度は何かしてくれるという形で行われるが、自分が待ちの姿勢でいてはこの精神を成就することはできない。このような能動的な相互扶助精神は個々の島、あるいは村落の文化と深くかかわっているが、ヴァヌアツの場合は、都市においてもそれが貫かれているという点が重要なのである。

ポートヴィラは、英仏共同統治領時代から植民地の首都として建設され、独立後も近代都市として歩んできた歴史を持っている。この近代都市は、しかし、社会学で一般に考え

られているような、ゲゼルシャフト関係が中軸となる都市ではないのである。確かに公的な場においては、ポートヴィラは近代の原理によって支配されており、その意味ではゲゼルシャフト的な関係が重視される。しかし、私的な場においては、人々の生活を律しているのはゲマインシャフト関係なのである。各島の出身者が作り出すコミュニティこそが、人々の私的領域を占めており、そこでは出身地の言語、慣習が作動しているのである。しかし、ポートヴィラは、村落ではない。異質な人々が共存することが許されている都市空間であり、公的な場では市場原理などの近代の原理が流通するところなのである。筆者は、こうした南太平洋の都市のあり方を、「ゲマインシャフト都市」という概念で捉えようとしている（吉岡 2016）。

ゲマインシャフト都市におけるコミュニティのあり方は、ゲマインシャフト的ではあっても、村落共同体にみられるようなものとは性質が異なっているというべきであろう。それは、都市らしさを伴ったゲマインシャフト的共同体であり、都市らしさを媒介として他のコミュニティと連関するような仕組みを持っている（吉岡 2016: 274）。つまり、ポートヴィラは、バラバラの村落共同体が集まってできているのではなく、互いに関連することで都市としてのまとまりを作り出す、差異化されたゲマインシャフト空間の集合ということになる。こうした都市のあり方、あるいは都市のコミュニティのあり方こそが、災害直後から助け合いながら自らの手で復旧への道を歩みだす素地となっていると考えられるのである。

## おわりに

本論では、ゲゼルシャフト的關係が支配的であるはずの都市において、お互いの助け合いによって復旧を短期間で成し遂げたヴァヌアツの事例を取り上げ、その都市の性質をゲゼルシャフトではなくゲマインシャフトから考える視点を提供することで、レジリエンスの高さの源泉を考えようとした。ゲマインシャフト的關係がおしなべてレジリエンスの高さを導くわけではないだろうが、少なくとも都市においてそうした要素はレジリエンスにとって重要な意味をもつとだけは言えるだろう。レジリエンスの人類学を遂行する上で、こうした大枠を踏まえたうえで、災害時における人々の現実の対応、コミュニティ内部およびコミュニティ間の人々の動きを詳細にみることで、レジリエンスがどのようにして生み出されるのかを解明していくことができると考えている。

オセアニアの島嶼国は、地球温暖化の進行とともに今後多くの災害に見舞われると懸念されている。特に、最も頻発するとされるのが巨大なサイクロンによる災害である。サイクロンは高波をも併発させるため、サンゴ礁島などは津波被害と同様の被害をこうむることになる。こうした状況を踏まえて、災害に強いコミュニティのあり方を考え、コミュニティ力を高めて被害を最小限に食い止める防災の方策を考えるためにも、オセアニアにおけるレジリエンスの人類学を進める必要があるだろう。

## 註

- (1) ヴァヌアツの人々の主食はタロイモやヤムイモ等の根菜類である。従って通常のサイクロンでは、地上の産物は被害を受けても、地中にあるイモ類まで被害が出ることは頻繁ではないと考えられる。しかし今回のサイクロンでは、これらが根こそぎ吹き飛ばされたり、水害でやられたりした地域が出たということである。
- (2) カヴァというのはコショウ科の灌木であり、その根を絞って取れる樹液は、同じくカヴァと呼ばれてヴァヌアツの重要な換金作物となっている。ヴァヌアツの二つの都市部、首都のポートヴィラと地方都市のルガンヴィルには、カヴァを飲ませるカヴァ・バーが無数に存在しており、インフォーマル・セクターの産業としても重要な位置を占めている。
- (3) サイクロン・パムが通過した直後のポートヴィラ住宅地の航空写真は、<http://www.afpbb.com/articles/-/3042775?pid=15484397> 参照。破壊された住居の様子は、<http://www.afpbb.com/articles/-/3042669?pid=15486620> 参照（いずれも、2016年6月13日現在）。
- (4) 米について言えば、タンナが 175.1 トン、それに次いでペンテコストが 116 トン。肉類缶詰は、タンナが 7 トン、それに次いでペンテコストが 4.6 トン、ヌードルがタンナ 5.9 トン、次いでペンテコストが 3.9 トンとなっており、どれをとっても、ペンテコスト島への配布が、エファテ島、シェパード諸島、アンブリウム島、エピ島、エロマンガ島などをはるかに凌駕している。

## 引用文献

アルドリッチ, D. P.

2015 『災害復興におけるソーシャル・キャピタルの役割とは何か―地域再建とレジリエンスの構築』石田祐、藤澤由和訳、ミネルヴァ書房。

梅津千恵子、真常仁志、櫻井武司、島田周平、吉村充則

2010 「アフリカ農村世帯のレジリエンスへの序論」『平成 21 年度 FR3 研究プロジェクト報告』総合地球環境学研究所、pp.150-158.

大矢根淳

2010 「災害・防災研究における社会関係資本(Social Capital)概念」『社会関係資本論集』1:45-74.

浦野正樹

2007 「脆弱性概念から復元・回復力概念へ―災害社会学における展開」浦野正樹・大矢根淳・吉川忠寛編『復興コミュニティ論入門』弘文堂、pp.27-34.

加藤 敏

2008 「脆弱性モデルからレジリエンスモデルへ」『精神経誌』110-9:751-756.

木村周平

- 2005 「災害の人類学的研究に向けて」 『文化人類学』 70-3:399-408.  
齊藤和貴、岡安孝弘
- 2009 「最近のレジリエンス研究の動向と課題」 『明治大学心理社会学研究』 4:72-84.  
澁谷利雄
- 2007 「スリランカ被災地の現状と今後の課題」 林勲男編『国立民族学博物館研究フォーラム 2004 年インド洋地震津波災害被災地の現状と復興への課題』国立民族学博物館調査報告 73, pp.13-26.  
島田周平
- 2009 「アフリカ農村社会の脆弱性分析序説」 E-journal GEO, vol.3(2): 1-16.  
清水 展
- 2003 『噴火のこだま—ピナトゥボ・アエタの被災と新生をめぐる文化・開発・NGO』九州大学出版会.  
林 勲男
- 2007 「はじめに」 林勲男編『国立民族学博物館研究フォーラム 2004 年インド洋地震津波災害被災地の現状と復興への課題』国立民族学博物館調査報告 73, pp1-4.  
吉岡政徳
- 1998 『メラネシアの位階階梯社会—北部ラガにおける親族・交換・リーダーシップ』風響社.  
2016 『ゲマインシャフト都市—南太平洋の都市人類学』風響社.
- Holling, C.S.  
1973 “Resilience and Stability of Ecological Systems.” *Annual Review in Ecology and Systematics* 4: 1-23.
- Ministry of Health  
2015 *Tropical Cyclone Pam: Vanuatu: Health Cluster Bulletin #4*. Ministry of Health, Government of Vanuatu, WHO, Health Cluster.
- National Statistic Office  
n.d. *2009 National Population and Housing Census. Basic Tables Report Volume 1*. Vanuatu National Statistic Office.
- World Food Programme  
2015 *Vanuatu: The Impact of Cyclone Pam*. World Food Programme.